



Title	考慮の前提である余地と決定論の両立性〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	本間, 宗一郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15991号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92370
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Souichiro_Honma_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 本間 宗一郎

学位論文題名

考慮の前提である余地と決定論の両立性

本論文は、古来問われてきた決定論と自由意志の両立問題を取り上げ、実際にした行為とは異なることができること——近年の用語法では「余地 (leeway)」——が、同時には行うことができない選択肢の中からどの行為を選ぶかを決める過程——すなわち考慮——の前提となっていることに注目し、考慮の前提となっている余地が決定論によって脅かされることはないとする両立論を擁護することを目的としている。厳密には、考慮の前提となっている余地は決定論と両立するとする「考慮の前提である余地に関する両立論」と、決定論を信じる者であっても合理性を損なうことなく考慮をなしうるとする「考慮両立論」とが区別され、本論文はその両者を擁護することになる。その擁護にあたって本論文が最終的に採用するのは、信念的偶然性にもとづいて余地を理解する立場、すなわち、考慮の前提となっている余地を、考慮者がもっている信念に照らしてどの選択肢を行うかが特定されていないこととして理解する立場である。その結論を展開するのに先立って、本論文はまず準備として、第1章で考慮の前提となっている余地の重要性と、その意味での余地と決定論に関する両立論を擁護することの意義を確認した後、第2章では余地と決定論の両立問題をめぐる現代の議論の参照点となってきた帰結論証の研究状況を概観する。第3～5章では、本論文が採用する立場とは異なる余地両立論の主要な立場を取り上げ、それぞれ批判的に検討する。最後に第6章では、本論文が積極的に提唱する立場、すなわち信念的偶然性にもとづいて余地を理解する立場を擁護する。

第1章では、まず、考慮において余地が前提となっていることの重要性が、考慮者は合理的であるかぎり考慮中のどの選択肢も行うことができると信じているというテーゼ——能力についての信念説 (Belief in Ability Thesis) ——に照らして示される。その際、本論文の方針が、道徳的責任の正当な帰属に余地が必要か否かに問題意識が集まっている主流の研究動向とは異なることが確認される。その上で、「考慮の前提である余地に関する両立論」と「考慮両立論」とが区別され、本論文はその両者の擁護を目指すことが宣言される。さらに、考慮の前提となっている余地を一般の人々は非両立論的だとみなしていることを示唆する実験結果を取り上げ、それでもなお両立論の擁護に意義があることが、常識的見解の部分的修正を提案する改定主義 (revisionism) の立場から擁護される。

第2章では、決定論と余地の非両立性を示す論証として現代の議論の参照点となってきた帰結論証 (consequence argument) のうち、もっとも標準的なバージョンとされる P. van Inwagen の「第三の論証」を取り上げ、主にそこで用いられる推論規則 $(\beta) \text{ } Np, N(p \supset q) \vdash Nq$ の妥当性をめぐって展開されてきた批判と擁護の応酬を詳細にサーヴェイする。その論争から得られる本論文についての教訓は、帰結論証を批判して余地両立論を擁護するためには、決定論が正しいと仮定した上で、両立論が正しいという論点先取を避けよという要請に従う必要があり、そのためには両立論的な余地のあり方を具体的に提示しなければならないということである。この点では、以下で取り上げられる余地両立論の立場は、いずれも帰結論証を批判するための要件を満たしていることが確認される。

第3章では、過去や自然法則を変える能力として余地を捉える両立論のいくつかの立場が批判的に検討される。具体的には、過去をある意味で変える能力として余地を捉える立場である引き返し (backtracking) 余地両立論と、自然法則をある意味で変える能力として余地を捉える立場である局所的奇跡両立論およびヒューム主義的両立論が取り上げられる。このうち引き返し余地両立論と局所的奇跡両立論は、本論文が導入する二つのテーゼ——考慮の際には考慮されている事

柄以外のことは変更しえない所与とみなされとする「考慮における所与テーゼ」と、考慮の際には現実には起きていないことは参考とされないとする「考慮における現実主義」——に訴えることで批判される。ヒューム主義的両立論については、法則に関するヒューム主義的付随や心的性質の物理的性質への付随など、ヒューム主義的両立論者が受け入れざるをえない前提を保持するかぎり、考慮の前提となっている余地を適切に捉えることに成功していないことが示される。

第4章では、非還元物理主義に訴える余地両立論、特に C. List の提示した立場が批判的に検討される。List は、非還元物理主義が正しいならば物理的決定論と心理学的非決定論が両立すると論じ、この点を、同一の行為に関するレベルの世界の歴史が異なる物理的レベルの世界の歴史によって多型実現されうるという仕方で説明している。これに対して本論文は、List の見解は不可識別者同一の原理に従うかぎり可能性の個別化に関して問題を抱えていること、また、物理主義と相容れない創発に訴えるリバタリアニズムと区別しにくいことを指摘して批判する。

第5章では、他のようにする能力としての傾向性として余地を捉える傾向性両立論を取り上げ、なかでも特に、考慮にもとづく選択に際して前提となっている余地を傾向性両立論の立場から論じた K. Vihvelin の見解が批判的に検討される。Vihvelin が余地の理解として提示した他のようにする「広い能力」は、その能力の顕在化に必要な刺激を実現する定言的能力が含まれていないため、「考慮における所与テーゼ」と「考慮における現実主義」に照らすと、考慮の前提となっている余地としては不十分であることが示される。

第6章では、信念的偶然性にもとづいて余地を捉えるという、本論文の積極的な立場が展開される。本論文が提案する信念的偶然性の定式化に従えば、考慮中の行為が信念的に偶然であることは、考慮中のどの選択肢についてもその期待効用がもっとも高いとは確からしく思われていないこととして理解されることになるが、このことは決定論の正しさとも決定論が正しいという信念とも両立し、さらに「考慮における所与テーゼ」および「考慮における現実主義」とも親和的であるため、「考慮の前提である余地に関する両立論」と「考慮両立論」の両者の擁護に適している。また、以上の方針に対しては van Inwagen が提示した例を適切に扱うことができていないとする反論が想定されるが、考慮の因果的効力性についての信念に訴えることでこれに対処できると論じられる。考慮中の行為の信念的偶然性および考慮の因果的効力性の二要件に訴える以上の方針に対して想定される他の反論にも応答した上で、本論文の立場が最終的に擁護される。

結論では、信念的偶然性にもとづいて余地を理解する本論文の立場が、「考慮における所与テーゼ」と「考慮における現実主義」の両者を適切に捉えていることがあらためて確認される。これに対して、他の余地両立論の立場、特に引き返し余地両立論、局所的奇跡両立論、傾向性両立論は、両テーゼを適切に取り入れることに成功していない。また、ヒューム主義的両立論と非還元主義的物理主義に訴える余地両立論は、考慮の前提となっている余地を適切に捉えられていないか、さもなければ物理主義を否定するという代償を伴う危険性がある。以上の点から、考慮の前提となる余地と決定論に関する両立論の立場としては、本論文の立場がもっとも有利であることが最終的に確認される。